

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K21775

研究課題名（和文）がん療養者と家族への共創的ケアを実現するケアマネジャーへのキャリア支援教育

研究課題名（英文）Career support education to the care manager who realizes co-creative care for client of cancer and family

研究代表者

中谷 久恵（Nakatani, Hisae）

広島大学・医系科学研究科（保）・教授

研究者番号：90280130

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では実践尺度とeラーニングによる学習システムの開発による成果があげられる。看取りのケアマネジメント実践の因子分析からは「チームケアを基盤にした看取りへの準備」「病状の進行に後れをとらないケアプラン作成」「本人と家族の気持ちをつなぐモニタリング」の構造が明らかとなり、この実践力は既知グループ法によって事業所所長と主任介護支援専門員は有意に高い実践力を有していることが示された。eラーニングの学習では、受講した介入群は対照群よりも実践カスコアが有意に上昇し、オンデマンド学習による教育効果が実証された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、映像を用いた事例検討によるeラーニングが、介護支援専門員のケアマネジメント実践力を高めることを検証したことである。介護支援専門員は主に民間施設に勤務しており、研修に参加できる時間や経費は十分に保障されていない。小規模事業所や中山間地や離島で働く介護支援専門員も平等にWeb学習には参加でき、いつでもどこからでも自由な時間に多施設の介護支援専門員間で学べるオンデマンドのICT教育が実現した。社会的意義と関連する点は、介護支援専門員の実践力が高まることで、在宅がん療養者が家族と充実した人生を最期まで共に過ごせる質の高い療養生活での在宅ケアマネジメントが提供できることにある。

研究成果の概要（英文）：The outcome of this study was the development of a practice scale and an e-learning-based learning system. Factor analysis of end-of-life care management practice revealed a structure of "preparation for end-of-life care based on team care," "making a care plan that does not lag behind the progression of the patient's illness," and "monitoring that connects the feelings of the patient and family," and this practice ability was shown by the known group method to be significantly higher for the office director and chief care support specialist. In the e-learning study, the intervention group that took the course had a significantly higher practice ability score than the control group, demonstrating the educational effect of on-demand learning.

研究分野：介護保険制度

キーワード：介護保険制度 介護支援専門員 ケアマネジメント 看取り がん療養者 ICT教育 eラーニング オンデマンド学習

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

高齢者人口の増加とともに、わが国のがんによる死亡数も年々増え続けている。2006(平成18)年には在宅療養支援診療所が制度化され、がん療養者にも介護保険が適用されたことで、地域での看取りが方向づけられた。しかし、在宅での看取りが進展しない背景には、在宅療養者のケアマネジメントを担当する介護支援専門員(以下、ケアマネジャー)の約8割が、医療者の資格を持たない介護系の職種であることが一因となっている。介護職は、教育歴が多様な人材が従事する分野であり、介護職のケアマネジャーには医療的ケアマネジメントへの苦手意識があるが、がんのケアマネジメント教育が未確立であるという教育課題も存在している。今後のわが国では、団塊世代がすべて75歳以上の後期高齢者となる2025年問題とともにがんでの死亡率も上昇を続け、高齢者の多死時代が到来する。ケアマネジャーは、医療職と連携して在宅での看取りまでを支える要となる職種であり、在宅療養者と家族のデマンドと療養上のニーズを丁寧に分析し、医療的支援を含めたケアプランを実現していくことが期待されている。

2. 研究の目的

本研究では終末期の在宅がん療養者に求められるケアマネジメント技術を学ぶ教育内容を明らかにし、がん療養者と家族が望む生活を実現するケアプランをイメージ化できるICTを活用した効果的な教育方法を開発することである。

3. 研究の方法

研究目的を達成するために2つの調査を段階的に実施した。まず、調査1において、在宅がん療養者のケアマネジメント技術のアイテムプールをもとに、ケアマネジメント技術を実践する評価指標となる尺度を開発した(2019~2020年)。次に、調査2において、在宅がん療養者へのケアマネジメント技術を学ぶ動画事例の教材を制作し(2021年)、動画をアップロードする学習サイト(教育用ホームページ)を開発して、eラーニングによる学習が教育効果を高めるかを受講群と非受講群を対象とした実践尺度の結果で評価した(2022年)。

(1)調査1:在宅がん療養者のケアマネジメント技術の明確化と実践尺度の開発

既存研究による前向きコホート調査で得られた在宅がん療養者への看取りのケアマネジメント実践項目の内容妥当性について、経験20年以上のスペシャリストの実践家5人と終末期やケアマネジメントの研究者(PhD)4名へのヒアリング調査を実施して項目の内容や表現を整理し、介護支援専門員41人にパイロット調査を行った(有効回収率93.2%)。その結果から、20項目すべてが在宅がん療養者のケアマネジメントに該当すると判断し、2020年に一県内の特定事業所加算~のいずれかを申請している256事業所に所属する768人のケアマネジャーを対象に、無記名自記式任意の質問紙調査を実施した。加算事業所にはケアマネジャーが最低3人は勤務していることから、一事業所に3人分の調査票を同封して所長宛に送付した。研究協力依頼書を受理したケアマネジャーには自由意思で個別に回答してもらうよう記載し、研究者への直接回答とした。在宅がん療養者へのケアマネジメント技術は、終末期を過ごすがん療養者を対象に療養経過にそった開始期から臨死期までに行ったケアマネジメント業務の前向き調査から、質的帰納的に把握した20項目の業務を技術の原案とした。実践は「できない、あまりできない、どちらともいえない、まあできる、できる」の5段階で尋ねた。分析は尺度の妥当性・信頼性の検証として、探索的因子分析による構成概念妥当性と既知グループ妥当性を解析し、信頼性係数を求めた。

(2)調査2:在宅がん療養者のケアマネジメント業務を学ぶeラーニング

実践尺度の技術を事例で学べる動画教材を作成し、事例から出題されるコンテンツを搭載したWebの学習サイトを開設して、eラーニングによる学習が教育効果を高めるかを実践尺度で評価した。eラーニングを受講した介入群に対して、平常業務を継続する非受講群(対照群)を設定し、教育効果を2群間で比較した。対象は某県の69事業所の介護支援専門員240人へ依頼を行い、任意で研究協力の意思表示をした受講希望者52人を、無作為に受講群と非受講群(対照群)に割付した。サンプルサイズは2群間パラメトリック検定と対応のあるt検定による両側検定でG powerにより23人とし、脱落者を考慮して1群30人で参加を募った。学習は1週目と2週目に前編10分と続編5分の動画事例を閲覧し、事例から出題される課題に自由記述の回答を投稿して学習者が相互に閲覧し、実践技術の事例解説の教材を読んで受講が終了する内容とした。受講前後と受講終了1か月後の3地点で技術を測定し、教育の評価を行った。なお、受講者には受講後の評価としてeラーニングで行ったICT教育をARCSモデルから引用した注意(Attention)、関連性(Relevance)、自信(Confidence)、満足度(Satisfaction)の調査内容で自作し、「まったく思わない、おもわない、どちらともいえない、思う、かなり思う」のリックカート尺度で尋ねた。

4. 研究成果

(1) 在宅がん療養者のケアマネジメント技術の構造と実践尺度

441人が調査票に回答し、技術項目に欠損値のない361人を分析対象とした(有効回答率46.9%)。年齢は平均50.2(±8.4)歳、経験年数は9.8(±5.4)年であった。技術項目には床効果、天井効果、項目相関において削除される項目がなかったため、20項目の探索的因子分析を行った。最尤法、プロマックス回転により2項目が因子負荷量の低値により削除され、3因子構造18項目を採択した。第1因子は「チームケアを基盤にした看取りへの準備」、第2因子は「病状の進行に遅れを取らないケアプラン作成」、第3因子は「本人と家族の気持ちをつなぐモニタリング」と命名した(表)。これらの因子の特徴から、看取りのケアマネジメント技術は退院後から臨死

表 在宅がん療養者へのケアマネジメント技術の探索的因子分析

因子名	ケアマネジメント技術項目	Chronba 係数
チームケアを基盤にした看取りへの準備	本人が予後を感じ取っていれば告知について再検討する	0.897
	死期を自然に覚めるように本人が語る思いを受けとめる	
	本人が希望する看取りの場について適任者が意思確認をする	
	死別後の家族の悲嘆を考慮し本人との対話を積極的に勧める	
	進行する病状と苦痛に医療が途切れないよう調整する	
病状の進行に遅れを取らないケアプラン作成	本人の最期の頑張りや家族に伝わるよう仲介を務める	0.822
	医療アセスメントの情報を取りながら看取りの不安に対処する	
	今後の療養経過に対応できるサービスを説明する	
	病状の進行を見越したケアプランを立てる	
本人と家族の気持ちをつなぐモニタリング	要介護認定の遅れが支障を来さないよう他機関と調整をはかる	0.872
	予測される病状を説明してもらうよう医師を後押しする	
	病状の進行に医療が迅速に対応できるケアプランを立てる	
	どう生きたいかを本人に問うようにモニタリングする	
	本人の望みが叶うタイミングを逃さないケア体制を組む	
	病状の進行に揺らぐ本人や家族の気持ちにより添い支える	
	在宅で看取る気持ちが維持できているかをモニタリングする	
	本人と家族が相互の思いを伝えているかをモニタリングする	
	本人が納得できているサービスであるかをモニタリングする	

因子抽出法: 最尤法 回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

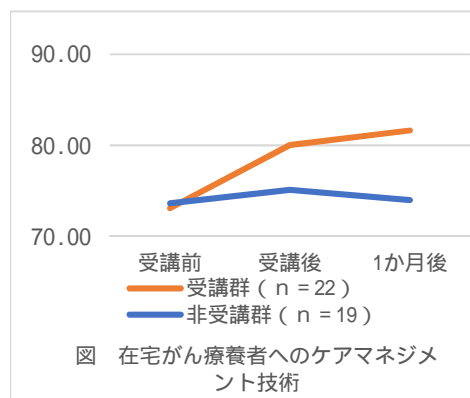
期までの療養経過にそった業務というよりも、療養時期のすべてを通して共通するケアマネジメントの特徴が得られ、チームケアとケアプラン作成およびモニタリング業務の重要性が明らかとなった。ケアマネジメント技術の総合点は、既知グループ法による分類で事業所所長(P<.01)と主任介護支援専門員(P<.01)が有意に高く、がん療養者の受持ち数との相関(P<.01)や、がん療養者の看取り経験の有無(P<.01)といった、キャリアによる有意差があった。また、信頼性はすべての因子において係数が0.8以上であり、実践技術を測定する評価尺度としての実用可能性が示された。

(2) ICT教育におけるケアマネジメント技術を高めるeラーニングの有効性

動画事例による受講群は22人が完遂し、対照群は19人であった。受講前後と受講終了1か月後の3地点で両群間には3地点とも差はなかったが、群内比較では非受講群での差はなかったものの、群は受講前後(<.001)と受講前と終了1か月(<.001)の2地点で有意にスコアが上昇しており、受講後から1か月後も技術得点は維持されていた。受講前後のCohen's d値の効果量は6.911であった。

(3)eラーニングによるICT教育の評価

eラーニング受講の終了後にICT教育の評価を行った。ARCSモデルのAttention、Relevance、Confidence、Satisfactionの合計得点は総括的評価の「学習に参加してよかった」の質問と有意な相関が認められた($r = .685, P < .001$)。「学習に参加してよかった」の「思う」72.7%と「かなり思う」9.1%を合わせ、8割以上がeラーニングによる学習を肯定的に評価していた。一方で、ARCSモデルによる評価と技術得点との有意な相関はなかった($r = 0.261$)。



(4) 研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、一県内に限定した地域のケアマネジャーを対象としていること、サンプルサイズの目標に到達していなかったことにより、偏りのあるデータとなった。ARCSモデルで作した評価の信頼性などが今後の課題であり、今後も継続性のある調査が必要と思われる。

<引用文献>

大井 良和、動画教材を用いていかにして学習意欲を高めるか - ARCSモデルにもとづく動画教材の開発 -、日本教育工学会研究報告集、4、2021、259-264

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 泉宗美恵, 中谷久恵, 小野恵子, 彭徐金
2. 発表標題 がん療養者を対象とした介護支援専門員の在宅での看取りにおける実態調査
3. 学会等名 第26回日本在宅ケア学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Keiko Ono-Ogawa, Hisae Nakatani, Mie Izumune, Xuxin Peng
2. 発表標題 Factors affecting satisfaction by care managers with their care management practices for home cancer patients in Japan
3. 学会等名 The 9th World Congress of Clinical Safety (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中谷久恵, 小野恵子, 泉宗美恵, 彭 徐金
2. 発表標題 在宅がん療養者の看取りを支援するケアマネジメント技術の構造
3. 学会等名 第27回日本在宅ケア学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 泉宗美恵, 中谷久恵, 小野恵子
2. 発表標題 終末期がん療養者の在宅看取りに関する介護支援専門員の認識
3. 学会等名 第81回日本公衆衛生学会総会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小野 恵子 (ONO KEIKO) (10339773)	青森県立保健大学・健康科学部・准教授 (21102)	
研究分担者	泉宗 美恵 (IZUMUNE MIE) (40468228)	山梨県立大学・看護学部・教授 (23503)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	大西 睦子 (ONISHI MUTUKO)		
研究協力者	彭 除金 (HOU JYOKIN)	広島大学大学院・医系科学研究科・リサーチアシスタント	
研究協力者	井上 ゆりこ (INOUE YURIKO)	広島大学大学院・医系科学研究科・リサーチアシスタント	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------